

01010137
小杉未醒（放菴）《竹》
1920年代 紙本墨画，軸装 100.3×18.3 cm 平成23年度購入
釈文 ：豊後路や 竹ばかりなる山みちを 小雨すぎ行日は照りながら 未醒
解説 ：最小限の描法で竹を鮮やかに表現しており、小杉の中国絵画技法の研究姿勢がうかがわれます。書された短歌は小杉自作と考えられ、小杉が絵に短歌を賛じた最初期の作品と位置づけられます。

寄託
小杉放庵《日の出》
1933（昭和8）年 53歳 紙本着色，襖絵 各176.8×91.8 cm
平成19年度寄託（徳見寺蔵）

寄託
小杉放庵《竹林》
1933（昭和8）年 53歳 紙本着色，襖絵 各176.8×91.8 cm
平成19年度寄託（徳見寺蔵）
解説 ：徳見寺は、戦国の武将・織田信長が、琵琶湖を望む安土山に築城した安土城内に、自らを祀らせるために建立したと伝えられる寺です。1854（嘉永7）年の火災で三重塔や仁王門などを残して焼失して以来、仮本堂のまま存続していました。小杉放庵は、本堂再建のために奔走していた徳見寺の松岡範宗和尚と出会い、その活動に協力します。本堂再建には至らなかったものの、1933（昭和8）年の信長公三〇回忌にあわせて行われた仮本堂の大修理にあわせ、小杉が襖絵の制作を始め、1944（昭和19）年までに5点の襖絵が描かれました。

01010030
小杉放庵《蒼海》
1933（昭和8）年 53歳 紙本墨画淡彩，軸装 49.0×60.0 cm 平成7年度購入
釈文 ：みづかきと つばさあるみにならばやな くしわだつみのなみのたわふれ
解説 ：鶴のように水掻きと翼がある身になれたなら、この海原の波と戯れるのに。荒磯の上に群れなす鶴を描いた作品は、1932（昭和7）年に小杉放菴が出版した『奥の細道画冊』（春陽堂）所収の佐渡に取材した《荒海》や、同年個展で発表した《蒼海》があります。翌年に描かれた本作は、これらを発展させたものと考えられます。ウミウの眼にかすかに置かれた青色にも注目です。

01030001
小杉放庵《日光全圖》
1935（昭和10）年頃 55歳頃 紙／水彩 36.8×99.1 cm 平成4年度管理換

資料
『日光全圖』
刊行年月 ：1935（昭和10）年9月 発行元 ：日光町観光課
小杉放菴記念日光美術館蔵
解説 ：1935（昭和10）年9月に日光観光課によって日光案内のパンフレットが刊行され、小杉放菴による日光を一望できる鳥瞰図が掲載されました。パンフレットの発行者は日光町長であった清水秀（比庵）。裏面には、日光の名所やお土産の情報が掲載され、ポケットサイズに折りたたむことが出来るものでした。原画は旧日光市役所でながく保管された後、当館が開館する際に移管されました。

01010077
小杉放庵《山の春》
1940年代 紙本着色，軸装 25.6×40.9 cm 平成11年度寄贈〔大木コレクション〕
釈文 ：春やまに 立つ雲見れば人の世の やさかのなげき忘るべきなり

01040001
小杉放庵《山翁幸仕》
1944（昭和19）年 64歳 紙／コンテ 66.5×50.5 cm
平成4年度管理換〔栃木県指定有形文化財〕
比庵の言葉 ：〈関根さんの手紙に、日光第一小学校に小杉放庵先生の最近の作品がある、斧をかついだ老爺がへうへうと軽い足どりで山へ出掛けるところでもあらうか少し面長な齒の抜けたやうな面輪が或は放庵先生の自画像かと思はれるところもある、と。それは関根さんのいふところがあたつて居るかと思ふ。先生は意識して自分に似た顔にかゝれるかどうか知らぬが、先生のかゝれる人物の顔は多く先生の顔を想ひ出させるやうに見える。先生の顔は直ちに画にかける顔で結構だと思ふ。そこへゆくと小生の顔はどうも画にならない。洋画とかういふ顔もいい と思ふけれど日本画には向かない顔である。さうかといつて小生の顔がさう俗悪な顔とも思つてゐない、市中でよく見る顔に比べれば少しは上等のつもりであるが、それでも良寛や人麿の顔の代用にはならない顔である。〉（駒込だより』『下野短歌』22巻2号,1950）

01010150
小杉放菴《つくばやま》
1950-1960年代 紙本着色，額装 29.0×46.2 cm 平成25年度寄贈
釈文 ：つくばやま 山ふところの日だまりに 梅さくころとなりにけるかな

01010027
小杉放庵《正風祖師像》
1940-1950年代 紙本着色，軸装 62.5×56.5 cm 平成7年度購入
釈文 ：短章十七字 正風三百年 放菴
解説 ：江戸時代の俳人、松尾芭蕉が確立した「さび」「しをり」「細み」「軽み」を中心とする俳風を正風（蕉風）と呼ぶことから、「正風祖師」は松尾芭蕉を指します。小杉放庵は専ら短歌を詠んでいましたが、芭蕉と『奥の細道』に関しては終生関心を持ち続け、友人の岸浪百草居とともに『奥の細道』の行程をたどり、《奥の細道画冊》なども制作しています。
比庵の言葉 ：〈放庵先生の芭蕉の顔は実にい、小生も之に倣つてかいてみやうとしたけれどとても出来るものではない。先生の芭蕉は芭蕉の顔であると同時に何処か先生の顔を髣髴させるものがある。先生には前にも芭蕉をかかれたものがあるが、之は先生の顔ではない。しかし先生の顔になつた最近の芭蕉が特にいい。先生は羨ましい顔をもつて居られる。小生の顔などは芭蕉にも良寛に適用せぬ顔である。芭蕉だの良寛だのといはないで、普通の老人の顔としては通用するであらうかと思ふのであるが、それは無論通用しなければならぬが、なるべくは凡庸老人でなく、何か画になる面白い顔に適用出来さうなもののだと考へてある。〉（『亦樂堂隨筆』『雨幾多満』6巻6号,1946.6）

01010079
小杉放庵《良寛和尚》
1950-1960年代 紙本着色，軸装 30.4×29.4cm 平成11年度寄贈〔大木コレクション〕
釈文 ：良寛和尚詩曰 夜雨草庵裡 双脚等閑伸
歌曰 夜あくれば 杉の下庵からす鳴く 今日もよき世の人の数かも
書き下し ：良寛和尚の詩に曰く 夜雨草庵の裡 双脚等閑に伸ばす

01010082
小杉放庵《石上人》
1950-1960年代 紙本墨画淡彩，軸装 48.0×50.6 cm
平成11年度寄贈〔大木コレクション〕
釈文 ：木のうへに 鳥ひとつ鳴き石の上に わがひとり居る春の山かな／いしのうへに あぐらをすれば秋の陽の ぬくもり残る石の肌哉／夕雲のそよそよにおりて石を抱けばいし眠るなり／ねむられぬ夜を出て見れば草原に石ひとつあり月照りて居り／この石や火のよ水のよ神の代のいよくへにへてわれと相見る／右 石のうた五首

04530007
小杉放庵《「この国に」歌碑》
紙本拓本，軸装 43.1×63.8 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1952（昭和27）年 現所在地 ：群馬県甘楽郡下仁田町, 下仁田町歴史館付近
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（1990.8.25）
釈文 ：この国に よき日照る日をみちばたの 石になりても待たむぞおのれ 放菴

04530001
小杉放庵《松尾芭蕉「しばらくは」句碑》
紙本拓本，軸装 76.7×55.4 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1956（昭和31）年 現所在地 ：日光市立安良沢小学校
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（不明）
釈文 ：しばらくは 瀧にこもるや夏の初 芭蕉翁おくの細道うら見のたきの吟 放菴書

04530002
小杉放庵《松尾芭蕉「あらたふと」句碑》
紙本拓本，軸装 96.2×56.7 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1956（昭和31）年 現所在地 ：日光社寺文化財保存会事務所（旧東照宮宝物館）前
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（不明）
釈文 ：あらたふと青葉若葉の日の光 芭蕉翁おくの細みち 日光山吟

04530015
小杉放庵《西行法師歌碑》
紙本拓本，軸装 80.2×60.0 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1956（昭和31）年 現所在地 ：日光市稲荷町, 稲荷神社
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（不明）
釈文 ：ながむながむ 散りなむことを君も思へ くら髪山に花さきにけり 放菴書

KOSUGI HOAN MUSEUM OF ART, NIKKO	 小杉放菴記念日光美術館
---	---

清水比庵生誕140年

歌書画の人 比庵と放菴

2023年2月4日〔土〕― 4月9日〔日〕

出品目録・作品解説

―― 私の書は、書を立派に書こうというよりも、歌を立派に書こうという書なんです。歌を立派に書こうというための書なんですから、いわば書家の書でなしに、歌よみの書です。――
清水比庵「書のあゆみ」1966年秋 全国大学書道学会特別講演（東京学芸大学）より

清水比庵

	※年齢は数え年
04530011	
清水比庵《「春風の」歌碑》	
紙本拓本，軸装 120.8×65.0 cm 平成17年度寄贈	
建立年 ：1959（昭和34）年 現所在地 ：日光二荒山神社 神苑	
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（1989.5.30）	
釈文 ：春風の 二荒のやまはおほらかに 雲井にそびえまとはかくるゝ 喜寿 清水比庵	
解説 ：全国に 20 点ほどあるという比庵の歌碑のうち、第 1 号がこの日光の歌碑です。比庵が旧日光市の名誉市民となり喜寿を迎えたのを機に、古河電工日光製銅所内で発行されていた短歌誌『みずなら』同人たちの発起により、当時市内にあった公会堂前（比庵が日光町長時代に購入した土地）に本碑が建てられました。石は大谷川の自然石が用いられています。その後、市街地整備にともなう公会堂改築により一時期大谷川河畔に移され、のち日光二荒山神社神苑にある二荒霊泉そばに移設されました。	

04530018
清水比庵《「湯西川」歌碑》
紙本拓本，軸装 25.5×35.5 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1965（昭和40）年頃 現所在地 ：日光市湯西川, 平家本陣ホテル
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（1989.5.25）
釈文 ：湯西川 野天風呂に他の人居らず われら浸りてかじかを聞くも 比庵八十三

04530019
清水比庵《安良沢小学校「まごころ」碑》
紙本拓本，軸装 25.3×61.0 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1969（昭和44）年 現所在地 ：日光市立安良沢小学校
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（不明）
釈文 ：まごころ

04530020
清水比庵《安良沢小学校「まごころ」碑碑陰》
紙本拓本，軸装 36.3×48.2 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1969（昭和44）年 現所在地 ：日光市立安良沢小学校
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（1987.5.30）
釈文 ：安良沢小学校創立十五周年記念 昭和四十四年十一月 日光市名誉市民 清水比庵 書 石工 加藤孝一

04530024
清水比庵《目黒真理子歌碑》
紙本拓本，軸装 42.0×54.0 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1972（昭和45）年 現所在地 ：那須郡，県立なす高原自然の家付近
探拓者・探拓年月日 ：小山田恒夫氏（1988年）
釈文 ：帰りたしと おもえば夢にのりてくる 那須野は今日も吹雪きいるらし 真理子 比庵書

04530013
清水比庵《清瀧寺歌碑》

紙本拓本，軸装 142.5×59.1 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1975（昭和50）年 現所在地 ：日光市，清瀧寺
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（1989.5.24）
釈文 ：下野の 国巡礼札所第一番 日光清瀧観世音雨ほとゝぎす 九十三叟 清水比庵
解説 ：本碑について、比庵の娘である明子氏は次のような随筆をのこしています。〈(昭和)五十年五月、病床上に臥して以来、父は早くよくなって日光へ歌碑を書きに行くのだと言って恢復を待っていたが遂に果すことが出来なかった。ひとつは日光清滝寺に星野利一氏によって建てられたもので、五十年十一月十六日除幕された〉（清水明子「父逝きて日光に歌碑二基」『比庵あけくれ』私家版，1981）

04530017
清水比庵《妙雲寺歌碑》
紙本拓本，軸装 51.0×33.0 cm 平成17年度寄贈
建立年 ：1982（昭和57）年 現所在地 ：那須塩原市，妙雲寺
探拓者・探拓年月日 ：関口喜平氏（1987.9.6）
釈文 ：杉大樹 間を狭く並び立つ 妙雲寺山門 誰がすぐ見ゆ 比庵八十六

資料
『歌集 山鳩』
刊行年月 ：1932（昭和7）年12月 発行元 ：二荒社
著者 ：横島武郎 装幀・序文 ：清水比舟（比庵）
個人蔵
解説 ：著者の横島武郎は、刊行当時は日光第一小学校の教師だった人物。装幀と序文を〈比舟〉時代の清水比庵が提供しています。

資料
『歌集 満天星』
刊行年月 ：1934（昭和9）年9月 発行元 ：二荒社
著者 ：安藤栄樹・今井保夫・杉浦貴一 装幀・序文 ：清水比舟（比庵）
個人蔵
解説 ：3人の著者は、清水比庵が古河電気工業日光電気精銅所経理課長として単身赴任していた時に参加していた短歌誌『満天星』同人。同誌が他誌と合併後、この3人で本歌集を出すにあたり、日光町長だった〈比舟〉号時代の比庵が装幀と序文を提供しました。なお、栃木県立図書館には比庵自身が寄贈した同じ歌集が所蔵されています。

資料
『二荒』2巻7号, 3巻7号, 4巻1号・5号, 5巻3号, 6巻5号, 9巻4号
刊行年月 ：1931（昭和6）年4月, 1932（昭和7）年4月,10月, 1933（昭和8）年2月, 12月, 1935（昭和10）年2月, 1938（昭和13）年1月
発行元 ：二荒社 装画 ：小杉放菴 平成30年度寄贈

資料
『二荒』10巻1号～12号
刊行年月 ：1938（昭和13）年10月～1939（昭和14）年9月 発行元 ：二荒社
題字 ：清水比庵 装画 ：小杉放庵 裏画 ：川上澄生
平成13年度寄贈〔清水家旧蔵〕
解説 ：1929（昭和4）年10月に清水比庵主宰、菊地和多治編集人、鬼平一郎発行人として日光で創刊。日中戦争中の 1939（昭和14）年10月に姉妹誌『下野短歌』と合併するまで 10年間続きました。毎号、比庵や会員たちの短歌と随筆が載り、比庵を中心とする日光周辺のネットワークがうかがえる、日光の郷土史研究としても貴重な資料です。比庵の随筆や通信文には、ときに小杉放庵や小林草悦ら画家の名前も登場。1929（昭和4）年の第 2 号から小杉放庵が装画を、1933（昭和 8）年から川上澄生も屏絵や裏面カットを提供しており、両者が活動を同じくした唯一の雑誌でもありました。

資料
『下野短歌』12巻12号, 13巻3号, 14巻4号・7号・11号, 15巻2号・8号・10号, 17巻1号

刊行年月 ：1939（昭和14）年12月, 1940（昭和15）年3月, 1941（昭和16）年4月, 7月, 11月, 1942（昭和17）年2月, 8月, 10月, 1944（昭和19）年1月
発行元 ：下野短歌社 装画 ：小杉放庵・川上澄生 平成30年度寄贈
解説 ：1929（昭和4）年7月に石川暮人・岸良雄・小林勇・寺内武らの手により創刊された短歌誌。『二荒』とは姉妹誌の関係にあり、同人も両誌がけもちという歌人が多く、日中戦争中の 1939（昭和14）年10月に合併を余儀なくされます。しかし合併は清水比庵・石川暮人・野沢曉鐘の三者会談によって円満に行われ、戦時下歌誌合併の模範として歌壇の注目を浴びたといえます。合併後は江連白潮が編集を担当、比庵・暮人・曉鐘が選歌を行い、小杉放庵も引き続き2年間装画を提供、その後は川上澄生が装画をしばらく担当しました。太平洋戦争の悪化により、1944（昭和19）年4月号刊行後、一時休刊。

1946（昭和 21）年 4 月に復刊後、全国的発展にともない、1968（昭和 43）年 1 月に比庵が主宰する『窓日』へ改題。現在も全国に会員を有する短歌会として活動を続けています。

資料
清水比庵
《『下野短歌』装幀原画（クロアゲハ）》
制作年不詳　紙本墨画、まくり　25.5×17.0 cm　平成 18 年度寄贈

資料
小杉放庵
《清水比庵宛書簡》
1939（昭和 14）年 6 月　紙本墨書、軸装　平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]
釈文 : 梅雨連天一山の雨の音を聞かれ居らるゝこと、存候　此度の御退身まことに本意なき次第と思ふあまりにこの二荒一図を拝呈致候　日光の者の中に往生も老兄の數年私なき町政の御骨折を知る一人なることを表はし度きまゝに候　御笑留を得ば幸甚に候／六月廿九日　放庵啓／比庵老兄几下
解説 : 比庵が日光町長を辞した時に、小杉放庵から届いた書簡。日光の観光行政の基礎を築き上げた業績が高く評価されている比庵だが、1939 年に部下の不始末の責任をとって辞職するという結末を迎えた。小杉の書簡はそれを労り、男体山の絵を 1 点贈するという内容が記されている。この絵については現在、所在不明。

01010170
清水比庵
《貼交屏風》
1930 年代後半　紙本墨画淡彩、屏風（二曲一隻）173.5×87.5 cm（外寸）平成 27 年度寄贈
釈文 : ものうひて　みつればうたをよましけむ　良寛僧のおもほゆるかも／　ともしきに　みちたらひて歌よみて　つねありがたくなりけむかも　比庵
解説 : 右から良寛、笹にカエル、岩にセキレイ、菊の花。短歌のない絵のみという比庵作品は珍しい。雅号を（比舟）から〈比庵〉へ変えた 1935（昭和 10）年から、日光町長を辞す 1939（昭和 14）年までのあいだに制作されたと考えられる、初期の貴重な作品です。比庵と親交があった宇都宮の教育者鈴木陽吉氏、またその娘で比庵に短歌の指導を受けていた松浦永子氏の旧蔵品。もともと比庵から贈られたこれらの水墨画が屏風仕立てになっていましたが、当館寄贈後の修復時に、絵の順番はそのままに新しい屏風へ仕立て直しました。

01010097
清水比庵
《南瓜》
1940 年代　紙本着色、額装　31.6×40.6 cm　平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]
釈文 : 日よけにも　ならむとおもひ窓まへに　うゑし南瓜ののびのびて
　棚はひわたりひろき葉の　しじにしげりて大き花黄に　さきつぎてあはれこは　いみじき日よけうつくしと　ほめてありしが涼しとは　めでてありしがしじに葉は　しけりてあれどつぎつぎに　花はさけども実のならぬ　いかに花さきて実にならざるはたが慍か　これは日よけの南瓜の蔓なり　比庵

資料
『日光市名誉市民経歴及事績』
刊行年 : 1958（昭和 33）年　**発行元** : 日光市
平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]
解説 : 旧日光市が 1958 年に初の名誉市民として清水比庵、小杉放庵、徳川家正を推挙した際に発行した各受章者の経歴紹介パンフレット。

資料
『市制五年のあゆみ』
刊行年月 : 1959（昭和 34）年 4 月　**発行元** : 日光市　**装幀** : 清水比庵
平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]
解説 : 日光町と小来川村の合併により旧日光市が誕生してから 5 周年を記念して刊行された記念誌。1958 年に初の名誉市民として推挙された清水比庵、小杉放庵、徳川家正の紹介頁もあります。

01070022
清水比庵
《餘情》
1959（昭和 34）年　77 歳　紙本墨書、額装　31.0×57.8 cm　平成 12 年度寄贈
釈文 : 余情　喜寿　比庵

01010096
清水比庵
《谷深く》
1960 年代　紙本墨画淡彩、軸装　38.0×46.2 cm　平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]
釈文 : 谷深く　石を伝へるせきれの　それとは見えていと小さきかも　比庵

01010099
清水比庵
《海へ来て》
1950-1960 年代　紙本墨画淡彩、額装　34.5×49.0 cm　平成 14 年度購入
釈文 : 海へ来て　いとはるばろと見わたしぬ　海のはてには折りのあるか　比庵

01010098
清水比庵
《彩果》
1962（昭和 37）年　80 歳　紙本着色、額装　34.0×46.0 cm　平成 14 年度購入
釈文 : ともし火を　近く寄せつつ坐りたり　浮世の秋の一ところなり　八十　比庵
解説 : 比庵は数えて 93 歳の長命でしたが、意外にも大の野菜嫌いでした。代わりに好んでいたのが果物で、〈不味いものは栄養にならん、おれの野菜は果物じゃ、と勝手に理くつをつけて、うまいまいと果物はたくさん食べる。ご飯は入らぬが果物だけ、ということもあった〉とか（清水明子「老いのあけくれ」『比庵あけくれ』私家版、1981）。贈られてきた果物はいつも絵に描いてから食べていたそうです。

01070016
清水比庵
《年々に・・・》
1962（昭和 37）年　80 歳　紙本墨画、額装　27.1×24.1 cm　平成 4 年度寄贈
釈文 : 年々に　よきな年なれといのりつゝ　拾へる年のつもりたるかも　比庵　八十

01010095
清水比庵
《老松》
1962（昭和 37）年　80 歳　紙本着色、軸装　113.0×34.2 cm　平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]
釈文 : らんらんと　金色上る朝日かゝず　今日もあまねく晴れわたりたり　比庵　八十写
解説 : 老松（おいまつ）は長寿の象徴として古くから好まれてきた、謡曲から発祥した画題。比庵は喜寿を迎えた頃からよく小幅に松を描くようになりましたが、交流のあった洋画家小林和作からもっと大きく描くよう勧められ、1962 年の書初めに本作のような大きな老松を何枚も描いたと伝えられます。老いながらも力強く、楽しみにうねる松の木は、まるで人生まだまだこれからと筆をとり続けた比庵の自画像のようです。

01070037
清水比庵
《新年》
1963（昭和 38）年　81 歳　紙本墨書金泥、軸装　26.8×42.4 cm　令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]
釈文 : うつくしきもの　若くあり強きもの　また若くあり年あたらしく　八十一　比庵

寄託
清水比庵
《果実図》
1963（昭和 38）年頃　81 歳頃　紙本墨画淡彩、額装　34.0×44.8 cm 平成 26 年度寄託
釈文 : 大空を　おほひ尽せる雨雲が　そぞろにうごく大空うごく　比庵

寄託
清水比庵
《竹に雀》
1963（昭和 38）年　81 歳　紙本墨画、額装　34.8×53.3 cm　平成 26 年度寄託
釈文 : くれなゐに　にほへる朝に始まりて　わが一日をひとりたのしむ　八十一比庵

寄託
清水比庵
《蓮に蛙》
1963（昭和 38）年　81 歳　紙本墨画淡彩、額装　34.8×53.3 cm　平成 26 年度寄託
釈文 : 久しくも　見ざりし人にあひたるよ　生けるしるしのある一日なり　八十一比庵

01070038
清水比庵
《毎日佳境》
1963（昭和 38）年　81 歳　紙本墨書、軸装　88.8×34.4 cm　令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]
釈文 : 毎日佳境　八十一　比庵
解説 : 比庵と交流のあった歌人・丹内福壽が鉄道会社員として福島県白河市に勤務していた頃、1963 年 2 月 2 日付の比庵からの書簡に、《毎日佳境》の書を送るので、歌会をやる時にいつもかけてください、とあり、本作がこれに該当する書と考えられます。
比庵の言葉 : 〈『毎日佳境』　これが小生の標語である。歌詠みは常に佳作を得ることは難かしい、しかし常に佳境に居るといふのは心掛けである。歌が何故に楽しいかといへば毎日佳境に居ることが出来るから楽しいのである。毎日佳境に居れば、佳作は自然に偶然に出来る、佳作は求めても容易に出来ない、しかし佳境に居るといふことがほとんどにわかつてくと佳作偶然度は多くなってくる。〉（「駒込だより」『下野短歌』33 巻 6 号、1961）

01070039
清水比庵
《毎日歌境》

1964（昭和 39）年　82 歳　紙本墨書、軸装　97.0×31.2 cm　令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]
釈文 : 毎日歌境　比庵　八十二
比庵の言葉 : 〈増淵（梨輔）さんから蚤のやうに小さい字書いた葉書が来、それで拡大鏡を用て読んでみると、今回塩谷支社を設立するといふことが書いてあった。増淵さんは各地の歌会へもよく顔を出して熱心に歌を楽しんでゐる人であるから塩谷支社は必ずよい発展を遂げるであらうと思ひ、鹿沼、宇都宮、白河等の支社へ、「毎日佳境」と大書したものを送ったから、塩谷支社へも同じものを送らうと思ひ筆を執って紙に向つた瞬間、「佳境」を「歌境」と變へて書いたらどうであらうと思ひ、伏見稲荷大社の宮司から送られた赤紙へ太々と「毎日歌境」と書いて送った。／それからどうもこの「毎日歌境」が自分も気に入った。「毎日佳境」といふ文句は良寛の詩「故郷ヲ出デテヨリ後、東方諸国ノ行、毎日佳境ヲ過グルモ、寸短詩成ラズ」といふものから得た詞であるが、良寛のやうに云ふと佳境が消えてしまふ、只「佳境」とだけ云っておけば佳境は一のイメージになって眼前にある、といふことは前にも云つたことがあるが、之を「歌境」と變へて書く和我々には更に楽しく、更に親しいものとなる。〉（「駒込だより」『下野短歌』36 巻 9 号、1964）

01070040
清水比庵
《東海南山》
1964（昭和 39）年　82 歳　紙本墨書、軸装　33.8×54.4 cm　令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]
釈文 : 東海南山　八十二　比庵
解説 : 丹内福壽の名を襲っていた比庵は、中国の老人への祝いの言葉である「福如東海長流水　寿比南山不老松（福は東海へ流れる水のように長く、寿は終南山の松のように老いることはない）」からとつた《東海南山》という書を丹内へ送っていたことが 1964 年 1 月 22 日付書簡からわかつており、本作がその該当作と考えられます。

01070023
清水比庵
《晴好雨奇（蘇東坡）》
1967（昭和 42）年　85 歳　紙本墨書、軸装　136.6×68.0 cm　平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]
釈文 : 水光瀲灩晴偏好　山色空濛雨亦奇　若把西湖比西子　淡粧濃抹總相宜
解説 : 湖面を照らす日の光がさぎ波に写る晴れた日の湖はとても良い。周りの山々が覆んで見える雨の景色もまた素晴らしい。この西湖の美しさは、まるで絶世の美女西施が薄化粧の時も厚化粧の時もどちらも素晴らしいかったかのようだ。北宋時代の詩人・蘇軾（1036～1101）の「飲湖上初晴後雨詩」より。

01070041
清水比庵
《福寿》
1969（昭和 44）年　87 歳　紙本墨書、軸装　98.2×32.0 cm　令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]
釈文 : 福寿　比庵　八十七
解説 : 「福寿」は、幸福で長命であることを表すおめでたい言葉。比庵はこれを名にもつ丹内福壽への書簡（1964.1.22 付）のなかで、〈貴兄の名は完全に貴兄を表現してゐる。〉〈貴兄はまことに福寿相をした人物です。この福寿は物質的の意味に取る人が多いが、小生は主として精神的のことを話題と致します〉と述べています。

01070031
清水比庵
《長春》
1972（昭和 47）年　90 歳　紙本墨書、軸装　51.6×40.0 cm　平成 23 年度購入
釈文 : 長春　比庵　九十試筆

01070024
清水比庵
《新年詠》
1975（昭和 50）年　93 歳　紙本墨書、軸装　23.4×35.0 cm　平成 13 年度寄贈 [清水家旧蔵]
釈文 : 新年詠　満天の　くれなゐや天地の　神の恋やら比庵恋やら　比庵　九十三
解説 : 没年の正月に詠まれた歌。手書きの扇形に放射状に配された字が心地よいリズムを生んでいます。晩年の比庵は、朝夕の茜空を好んで詠んでいました。くれないの空に亡き妻を思い浮べたのか。どこか寂しさを感じさせる歌です。

01070027
清水比庵
《祭り》
1975（昭和 50）年　93 歳　紙本墨書、額装　30.6×96.5 cm　平成 17 年度管理換
釈文 : 御題　祭り　八百よろづ　神のいませばさかえゆく　まちも村居もまつりの太鼓　比庵　九十三

資料
清水比庵
《『大日光』装幀原画（楓に瑠璃鳥）》
制作年不詳　紙本着色、まくり　26.0×37.5 cm　平成 20 年度寄贈
解説 : 比庵は、数えて 76 歳の 1958（昭和 33）年から、93 歳で亡くなる 1975（昭和 50）年まで　18 年間にわたり、日光東照宮が発行する機関誌『大日光』の表紙絵を担当しました。本作はそのうちの原画のひとつと考えられます。

資料
清水比庵・小杉放庵関係資料アルバム
令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]
解説 : 歌人丹内福壽が、親しかった清水比庵を中心に、周辺人物の書簡や写真をアルバムに貼りつけ保存していたもの。小杉放庵の葉書も含まれている。

資料
清水比庵
《丹内福壽宛書簡》
1956（昭和 31）年～1972（昭和 47）年　令和元年度寄贈 [丹内福壽旧蔵]

小杉放庵

※年齢は数え年

01070033
小杉放庵
《臥看山》
1940 年代　紙本墨書、額装　19.0×53.2 cm　平成 24 年度購入
書き下し : 臥（ふ）して山を見る

01070006
小杉放庵
《人似花酒如泉》
1940-1950 年代　紙本墨書、額装　31.5×92.5 cm　平成 4 年度寄贈
書き下し : 人　花に似て　酒　泉の如し

01070010
小杉放庵
《茶三昧》
1950 年代　紙本墨書、額装　31.5×51.8 cm　平成 4 年度寄贈

01070011
小杉放庵
《清風》
1950-1960 年代　紙本墨書、額装　31.5×51.8 cm　平成 4 年度寄贈

01070026
小杉放庵
《満堂春風》
1950-1960 年代　紙本墨書、額装　23.5×83.0 cm　平成 17 年度寄贈
書き下し : 春風（しゅんふう）　堂に満つる

01070012
小杉放庵
《日々是好日》
1950-1960 年代　紙本墨書、軸装　133.8×37.9 cm　平成 4 年度寄贈
解説 : にちにちこれこうにち。晴れの日は晴れを楽しみ、雨の日は雨の日を楽しむ、毎日を平和な良い日として生きていくこと。中国・宋時代の仏教書『碧巖録』（1125 年）に記された言葉。

01020007
小杉未醒
（放庵）《泉》
1925（大正 14）年頃　45 歳頃　カンヴァス／油彩　179.0×363.0 cm　平成 4 年度寄贈

資料
小杉未醒
（放庵）『漫画一年』
刊行年月 : 1907（明治 40）年 10 月第 4 版　※初版は同年 1 月刊
発行元 : 佐久良書房　小杉放庵記念日光美術館蔵
比庵の言葉 : 〈先般東照宮で小杉放庵先生の追悼歌会があった。小生にも案内が来てみた、小生も出席する義理があるけれど暑いときなのでかんべんして貰った。しかし歌だけは出した。／小杉未醒の漫画本よりわれい画を習ひしことをかしくみてます／未醒は放庵の若いときの筆名である。当時未醒は実により漫画を沢山かいた、漫画といふのは今日の漫画とはちがひ、文芸的の雑画である。小生はこの歌で故人との親しみを詠んだつもりである。〉（「駒込だより」『下野短歌』36 巻 11 号、1964）

01010172
小杉未醒
（放庵）《成年三月図》
1910（明治 43）年　30 歳　紙本墨画淡彩、軸装　107.6×45.2 cm　平成 28 年度購入
解説 : 小杉放庵が〈未醒〉と号していた時代に制作された日本画。この作品が制作された年には、長女が生まれており、初節句のために描かれたのではないかと推定されます。